

公開対談シリーズ第16回

NINAGAWA 千の目

# 市村正親

# 蜷川幸雄

俳優

彩の国さいたま芸術劇場 芸術監督・演出家

晩秋の劇場にまるで金色の日差しが差し込んだような、上質な輝きと微笑みで会場を沸かせてくれた市村正親さん。広い経験と深い人間性に培われたプロフェッショナルな俳優としての姿勢は、市村さんの舞台への真摯な想いを私たちに感じさせた。



## 50歳半ばの僕に『ハムレット』をくれた幸福

**蜷川(以降 N)** 俳優の市村正親さんです。お久しぶりですね。

**市村(以降 I)** 蜷川さんからは、この舞台袖で早々にダメ出しをされてしまいました(笑い)。「ちょっと腹が出てきたのではないか。お前でも腹が出るんだ」と。もう来年は還暦ですから。

**N** そんなことないです、という視線が。今日は、市村さんファンばかりじゃないか。

**I** 蜷川さんのファンの人、はあーい。(拍手)

**N** どうですか? お父さんになった気分は。

**I** 本当に幸せです。人生が変わりました。いまミュージカル『ラカージュ・オ・フォール』の稽古をしているのですが、これは母親の

役です。自分が育て上げた子という台詞があるのですが、その実感が湧くんです。本当に蜷川さんのおかげですよ。いまのような生活になったのも。

**N** あれば運命だね。「ハムレットをやる」と言ってしまったのがいけなかったんだね。よかったね。

**I** よかったですね。『リチャード三世』をやっている最中でした。「お前であ、急にハムレットをやりたくなくなっちゃったんだよな」と言って下さった。普通は「ハムレットをやりたいたいのですけれど」と僕が蜷川さんをお願いして、「お前はまだだ」と言われるものですよ。まして54、55の頃で「お前でハムレットをやりたくなくなった」と言われた時には、本当に幸せだなあと思いました。一気に、ハムレットを演れましたね。

器用で努力家で、ちょっと芸人風の匂いもあり、それでいて新劇的な、劇団四季風の綺麗な活舌で演技がきちっとできる。それを意地悪して封じてやろうと。(蜷川幸雄)

## 市村正親という俳優の強さに意地悪をしたくなる

**N** 僕の現場で、市村さんは稽古場を明るくする“機嫌のいい俳優”さんです。市村さんが稽古場に入ってくると、日が差したように明るくなる。それは大事な資質のような気がしますが、どこから来ているんですか?

**I** 僕が思うには、親の影響と、3年間西村晃さんの付き人をやったということが、結構僕を変えているかもしれないですね。付き人の3年間は、21から24まででしたが、一番勉強になったことが多いんです。

**N** 付き人をやることによって随分変わったわけですか。

**I** 劇団四季に入った時も、常にいま演出家が何を求めているのか、僕がどうやればこの戯曲が一番喜んでくれるのだろうか、みたいな考え方をしていましたからね。

**N** その上市村さんは、すごい努力家です。シェイクスピア・シリーズの『ペリクリーズ』という芝居では、ずいぶん早くから本当に琵琶を弾く稽古をしていたそうだね。他のミュージカルをやっている時まで(笑い)。

**I** そうです。ミュージカル『モーツァルト!』の本番中の合間にロビーや楽屋で琵琶を弾いていました。隣の楽屋の山口祐一郎から「市村さん、琵琶はちょっとまずいなあ」と言われても、「そんなことはない、この音色が解らないのか」と説き伏せて(笑い)。

あとき蜷川さんは「次の『ペリクリーズ』ではお前の目も使わせない、手も使わせない。盲目の琵琶弾きにする。それで勝負しろ」と言ったんです。本当に弾いているのを大分後まで気づいてくれなくて、実は悔しかったんですよ。

**N** 僕は『ペリクリーズ』の時、日本的な音を出して欲しい、と言った。語りでも、琵琶を弾きながら綺麗な劇団四季風の発声ではなくて、ちょっと濁らしてほしいと言って、今までの持ち手ができないように彼を封じてやろうとしました。意地悪してあげようと思うのですが、彼はある種のサービス精神と、どこでこんないろいろな物を身に付けて来たのかと思うような力量で明るく切り抜ける。そんなまねな芸人風の匂いを持っている演劇人だと思っています。そして朗々とした演技も出来るから、そこが面白くて演出家としては時には壊してやりたくなくなるというところがあります。

**I** 実は僕も壊してほしいんです。演出家に切り刻まれ、そして最終的に戯曲と演出家と周りの人の力によって一つの形になっていく。僕は切り刻まれるのが好きなんです、切り刻む演出家がだんだん少なくなってきた。

**N** それは市ちゃんが出来るから、大したことのない演出家より上に行ってしまうんだよ。

**I** 僕の方から言うてしまうことが多いかもしれないね。

**N** その方がいいことが多いでしょう。

**I** だから悔しいのは、僕がやったのに、「いい演出ですね」と言われてしまうことです(笑い)。

## 蜷川さんから僕今日ひとつ、引き出しました

**N** さっきから意地悪という言い方をしているけれど、市村さんが歯が立たないような芝居はないかなあと実は思っているんだ。これがまた難しい。井上ひさしさんの芝居を演ったことはある?

**I** 好きですけど、ないです。

**N** 井上さんの作品には歌があるけど、朗々と歌いあげてヨーロッパ的な、劇団四季風な母音に還元されるような音にすると、どうも合わないんです。浪曲みたいに、ちょっと声を濁らせた方がいいところもあるけど、そればかりだと、今度は言葉がうまく伝わらないんです。そのところのバランスが難しく、面白い。いつか市村さんに苦勞してもらうには、今のところ井上さんの戯曲が一番いいんじゃないかと思うのですが。

**I** そうやって井上さんの作品と出会えるのはうれしいですね。実は、僕は今日、ある種のオーディションに来たんですよ。

**N** 何のですか。

**I** 舞台に立っている時は、いい仕事をしなかったら絶対次の仕事は来ないと思っています。誰が観に来ているか分からない。今日は蜷川さんからひとつ引き出せたのではないかと思います。次は井上ひさしさんで何かやれたらいいですね。

**N** でも井上さんは、なかなか脚本が出来ないからね(笑い)。ところで、次の芝居は何ですか?

**I** 再演の『屋根の上のヴァイオリン弾き』もありますけれど、新作で三好十郎の『炎の人』。役は、ヴァン・ゴッホです。

**N** やるんだあ。僕は若い頃、滝沢修さんのを生で観たよ。

**I** 僕はあの人の『オットーと呼ばれる日本人』というのを高校3年生の時に観たんです。あまりよく分からなかったけれど、激しい生き方を2、3時間の間見せてもらった感じがして、それで演劇の世界に入ろうと思ったんです。

**N** 『炎の人』はいいね。それは観たいな。そういう気持ちにさせる俳優が、市村正親さんなのです。今日は本当にどうもありがとうございました。



市村正親 いちむら まさちか  
埼玉県出身。1973年に劇団四季『イエス・キリスト＝スーパースター』でデビュー後、数々の作品に出演。退団後は92年の『ミス・サイゴン』(2004年・08年の再演版にも主演)をはじめ、ミュージカルからストレートプレイ、ソロ・パフォーマンスまで、多彩な舞台活動を展開する。まさに日本を代表する舞台俳優。02年芸術選奨文部科学大臣賞、02年及び04年読売演劇大賞優秀男優賞、07年ゴールデンアロー賞演劇賞受賞。07年紫綬褒章受章。

photo: 大原狩行 構成: 横山雅美